

スポーツ実況中継のコミュニケーションスタイル
— 実況中継の相互行為に現れる社会文化的価値観とその再生産 —

多々良 直弘

Communication Styles in Live Football Commentary
in Japanese and English

TATARA Naohiro

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第6号 2015年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The Sixth Issue, March 2015

キーワード：相互行為、スポーツ実況中継、社会文化的価値観、わきまえ

Abstract

People with different cultural backgrounds have different styles in conversational interactions. Numbers of previous studies have shown that the communicative styles of Japanese and English speakers are different in many respects. Through an analysis of live football coverage in Japanese and English, this article will attempt to explicate how the different communicative strategies are utilized in sports announcer discourse in both languages. This paper will also analyze how cultural ideas and culturally determined principles for interaction are reflected in the discourse of sports commentary in Japanese and English.

0. はじめに

スポーツの実況中継において、アナウンサーと解説者は単に目の前で行われている試合の実況をし、解説をしているだけではない。実況中継の参加者たちは社会文化的規範に従い、様々な語用論的技法を用いながら相互行為を行い、多層的なコミュニケーションを行っている。本稿は、まず日本語と英語の実況中継における相互行為を比較分析する。その後、この実況中継という相互行為の中で使用される言語的要素や語用論的技法を分析し、共話的、相互依存的に構築されている日本語の実況中継の中で、参加者がいかに日本文化のタテ社会を重要視する社会的規範に従い相互行為を行っているのか、またその社会的価値観がどのように再生産されているのか考察していく。

1. スポーツ実況中継における相互行為

スポーツの実況中継は文化的に異なる特徴をもつ。日本では、実況中継に参加する参加者には実況を伝えるアナウンサーと経験者としてコメントや批評をする解説者が存在するのが当然のことと考えられがちであるが、これは極めて日本的な特徴である。アメリカやイギリスなどの野球やサッカーの実況中継では、一人で中継を行うこともあるし、複数人が携わる事もあるが、日本のようにアナウンサーと解説者という明確な区分がない。イギリスのサッカー中継では、コメンテーターとサマライザー (Expert summarizer) が中継を行うことが一般的であるが、参加者たちはプレーに関して自分たちの見解を自由に発言している。本章では、スポーツ実況中継における慣習的な表現、参加者の役割、相互行為の特徴について概観する。

1.1 Sports Announcer Talk (SAT) における慣習的な言語表現

テレビ報道ではアナウンサーたちは社会において共有されているフレーム (枠組み) に則って、適切な言語表現や話し方、声の質、イントネーションなどを選択している。アナウンサーたちがこのフレームから外れた発言を行うと、視聴者は違和感を感じ、その言語行動を不適切なものとして捉えることとなる (Goffman 1981: 230-231)。

Ferguson (1983) は、我々の言語使用は常にコンテクストに根付いたものであり、どの言語においてもその状況により言語の使用方法や表現方法は異なるものであると述べ、野球やアメリカンフットボールの実況中継の語彙的、統語的、音声的特徴を示し、スポーツ実況中継のレジスターを分析している。スポーツの実況中継では常に進行する試合を伝えなくてはならないため、日常の言語使用とは異なる慣習化された言語形式が使用されている。Fergusonが挙げているSATの特徴には代名詞やコピュラ、機能語の省略 (*[It's a] fast ball. Milborn [is] remaining at third.*)、倒置の使用 (*On deck is big Dave Winfield.*)、結果を表す際に使用されるto不定詞やfor名詞の使用 (*Washington backhands it to throw across for the out.*) などがある¹。

Beard (1998) はサッカーの実況中継における慣習的な表現をまとめている。Beardが挙

げている特徴は、be動詞や主動詞の省略 (*Shearer [is standing by / running to the] far post*)、冠詞の省略 (*[a] good effort*)、代名詞の省略 (*[he] brings a ball*)、it'sやhere's (*It's Tony Adams, Here is Paul Ince*) の使用、受動態や倒置の使用 (*Fisted away by Kopke, Back in numbers the Germans*) などがある²。

Ferguson (1983: 169-170) によると、このようなスポーツ中継において慣習的に使用されている表現を視聴者はテレビやラジオを通じて繰り返し耳にし、子どもたちは非常に早い段階でこれらの特徴を身につけて行くという。更に彼はその他の状況における言語使用と同じように、スポーツ報道で繰り広げられる談話からも、その言語集団の言語規範が育まれていくと指摘している。

1.2 スポーツ実況中継における参加者の役割とモード

Goffman (1981) は実況中継のアナウンサーには、発声する人を指すアニメーター (animator)、読まれている原稿の著者であるオーサー (author)、最後にその発言によって立場や信念が表出されるプリンシパル (principal) の3つの役割があることを指摘している。三宅 (2003) は日本で放送されたオリンピックの実況中継における相互行為を分析し、アナウンサーと解説者の役割と権利を示している。三宅によると、アナウンサーは、実況放送全体の進行の責任をもつ、競技の進行や競技者の情報を視聴者に伝える、解説者に話しかけて専門的なコメントを聞きだす、個人的な批評やコメントをしないという特徴をもつ。一方、解説者は、アナウンサーから話しかけられて専門的な批評やコメントをする、アナウンサーに自ら話しかけて、専門的な批評やコメントをすることがある。

Goffman (1981: 232-242) はテレビとラジオのアナウンスでは、今現在起こっている事を同時に視聴者に伝える Action override mode (即時実況のモード)、視聴者に向かって直接話しかけている Direct mode (直接的モード)、そしてアナウンサーがゲストや解説者とやり取りをし、解説者が自身の経験や信念、そして感情を表現し、視聴者がそれを視聴している Three-way mode (3方向モード) という3種類のモードがあることを指摘している³。

このGoffmanの分類をもとに、三宅 (2003) は日本語の実況中継を分析するために、「ある話題が、誰によって、誰に向かって話されているか」ということを判断基準にした「インタラクションのモード」という概念を提案している。このインタラクションのモードには、アナウンサーが実況を単で行うアナウンサー・モード、アナウンサーが実況を行い、それに対して解説者があいづちなどでサポートをするアナウンサーサポート・モード、アナウンサーと解説者が最低一度はターンを取って会話形式でやり取りが行われる対話モード、解説者の発言に対してアナウンサーがあいづちをうつ解説者サポート・モードなどがある。アナウンサーと解説者がこれらのモードから逸脱したやり取りを見せると、実況放送のスタイルから外れてしまい、視聴者に対して不快感を与えてしまうことになる。

2. 日英語の実況中継に見られるコミュニケーションスタイルの差異

2.1 共話的コミュニケーションと対話的コミュニケーション

前章では実況中継における慣習的な言語表現、相互行為の参与者であるアナウンサーや解説者の役割、そして実況中継におけるモードについて概観したが、本章では日本語と英語のサッカー実況中継における相互行為の比較をしていく。

英語の実況中継では日本語とは異なり、実況アナウンサーと解説者のような明確な区分はなく、以下の(1)や(2)のようにそれぞれの参与者が自由に選手のプレーを描写、称賛、批判をしている。一方で英語の(2)と同じプレーを描写している(3)の日本語の実況では、アナウンサーは疑問文を使用して解説者に情報を求めていることがわかる⁴。

(1)

- 01 A: I think Gunnarson is guilty for giving the ball away, he'll get struck off in
02 possession here and Oscar makes him pay (中略) Gunnarson gets it wrestled
03 away from him by Ramirez that's when I'm talking about making good
04 possession, comes inside, that's straight over the head of Marshal, it's a good
05 strike (中略) I think he's gotta stop that one Marshal. I think he's going to get
06 a touch on this ball, it's a great kick from Ramirez in mid-field.
- 07 B: Kim, Oscar, and quite a scoring spree for club and country at the moment.
08 Kim, Lampard shuffling him off but it is a corner for Cardiff and they are
09 showing a quick response now.
- 10 A: Yeah, Frank Lampard just trying to rush that one away for a corner, just got
11 a clip of his toe. If Cardiff had to do anything, they've got to get their one
12 back quickly.
- 13 A: Whittingham takes it. Miss-kicked completely by Kim and Oscar now,
14 Hazard, so many options here. It's Willian and Marshal makes the save.
- 15 B: Well played Eden Hazard, he really waited for Willian there and good stop
16 this time from Marshal low down to his right.

(2)

- 01 A: Juan Mata takes it. John Terry dashed across, but it just veered wide.
- 02 B: May have brushed the post there John Terry, Medels on the post, you can
03 see, there it is there, ooh, just looks like it comes off the outside of the post as
04 Medel misses it, obviously confident that it was going away, but just brushes
05 that post.

(3)

- 01 A: マタが入れて、ターゲット後ろから来たあつと!テリーでしたか?斜めに走り
02 込んで来て
03 B: はい、コース変えましたからね。
04 A: わずかにそれました。

更に、以下の(4)のように日本語の実況中継ではアナウンサー(A)と解説者(M、G、N)が、疑問文やあいづちなどをそれぞれが使用し、共話的、相互依存的な相互行為により談話が構成されていることがわかる⁵。

(4)

- 01 M: まあ、一ついい形を作ったんじゃないですかあ? やっぱり
02 A: はい
03 M: 自分たちの一つのパタンで、
04 A: えー
05 M: ここで踏ん張りましたね、16番山口。
06 A: そして、Gさん、
07 G: はい
08 A: この距離ですけれども、本田の場合だとどうですか?
09 G: いや、狙うんじゃないですか?一発目ですからね、
10 A: はい
11 G: 是非狙って欲しいですよ、ここはね。
12 A: 距離としては30メートル近くはあるでしょうか?最初のセットプレーで
13 す。オランダ壁は3人。その壁の間に日本の清武、山口。
14 M: あとこぼれたとこだよね。[こぼれたところをねえ。
15 A: [二人がはいっています。岡崎、吉田、大迫が
16 狙っています。本田、本田、距離がある所。
17 M: お、ん?
18 A: 壁にあたりましたが…
19 グリエーニ主審の笛がなりました。もう一度やり直しますか?
20 N: おそらく壁が先に飛び出したので、
21 A: えー
22 N: もう一度やり直しのよう形になりますね。
23 A: [あー、ここですネ]
24 M: [あー、ここですネ]、デ・ヨングね
25 A: ACミランでもプレーするナイジェル・デ・ヨングです。対人の強さには

日本語ではアナウンサーが自分で全ての状況や見解を述べるのではなく、(08) や (19) のように質問を投げかけることで解説者を取り込み、見解を求める実況を行っている⁶。一方、解説者は自分の見解を述べる際に、疑問文 (09) や「文 (命題) に対する確言的 (再) 認識を聞き手も受容すると考え発話」(吉田 2008: 45) される終助詞の「よね」(11、14) を用いて他者の同意を求めたり、「おそらく」などの緩和表現 (20) を用いたりして、断言を避けた表現を使用している。このような解説者の説明に対して、アナウンサーは頻繁にあいづちをうっていることがわかる。また23、24行目に見られるような同時発話も頻繁に見られる。

このように日本語の実況中継ではアナウンサーと解説者が相互に協力し合いながら、水谷 (1985) が示しているように共話的に実況中継を構築していることが観察される。アナウンサーと解説者が互いに疑問形や緩和表現を用いて断言をしないやり取りは、批判を避ける一つのストラテジーであり、非常に日本的なものであると言えるだろう (藤井・金 (2014))。

一方、英語のコメンテーターたちは疑問文を使用して互いの見解を求めたり、自分の発言に対して相手の補助を求めることは行わず、日本語の実況放送に見られるような相互依存的な相互作用は観察されない。チェルシー対カーディフの試合の実況中継では、疑問文が使用されたのは2回 (共に相手の見解を求めるものではない)、付加疑問文は一度も使用されず、“you know?” に関しては2回使用されたのみであった。上述した通り、コメンテーターたちはプレーに対して自由に自身の意見を述べたり、称賛したり、批判を繰り広げているのであるが、その中で (5) に見られるような相手の見解に同意を示すことや、(6) のように相手の示した見解に対して明確に否定することが観察される。

(5)

01 B: He's done better in the past, I think.

02 A: Exactly, he fails to do so that one down there, Ivanovic, a good player.

03 B: And a fairly frequent goal scorer.

(6)

01 A: José Mourinho is back where he feels he belongs. It's time for Bridge.

02 B: No, I still think he's got a lot of work, Ian, to do to get it back to where it was

03 maybe for Chelsea, but it's time to become the full @@@ it once was under

04 Mourinho.

このように、英語の実況中継では参与者個人個人が自分の見解を自由に述べあう「対話

する言語文化」が、一方で日本語の実況中継ではアナウンサーが積極的に解説者に話しかけたり、質問を投げかけたりし、解説者もその質問に答えながら、相互協調的に実況中継の談話を構築するという「共に語る言語文化」の特徴が観察される（井出（2006、2014）、藤井・金（2014）、Fujii（2012）など参照）。

2.2 共同作業に現れる社会文化的規範とコミュニケーションスタイル

片桐（2011、2014）は、日本語、英語、アラビア語話者の教師と学生のペアによる15枚の絵を並べて一貫した物語を構築するという共同作業における相互行為を分析し、それぞれの文化には権威の考え方の違いにより、提案の仕方や提案の否定の仕方が異なっていると述べている⁷。物語を共同構築する際に英語では教師と学生は提案提示の頻度差はほとんどなく、地位による行動差は観察されない。日本語では社会的地位の高い教師の方が学生の参加を促しながら相互作用を進め、共同作業の全体に注意を払い、話の流れを構築する際の最終的な決定を行う。また教師により提示された提案を日本語の学生は否定することがほとんどないが、一方で英語話者には顕著な差はなく、むしろ学生の方が教師の提案を否定する頻度が高いという結果が出た。

英語話者は地位による行動選択に差異は観察されないが、日本語話者の共同作業における教師と学生という上位下位の関係が確立されている対話者間のやりとりでは、その関係が言語行動の前提となり、年齢の上下や社会的地位の関係を「わきまえ」ながら相互行為が行われる（井出 2006、2014）。そのため日本語では社会的地位の高い教師の方が全体の進行を管理し、提案をしたり、否定をしたりする一方で、教師により提示された提案を日本語の学生は否定することができないということになる。また、この両者の行為選択は「上位下位関係を確認するための相互行為シグナルとして機能している」と片桐（2014: 172）は述べている。

前節で見た通り、英語の実況中継においてはそれぞれの参加者が独立した個として自分の見解を述べる事が許されている。一方、日本語の実況中継の談話は共話的、相互依存的に共同構築されているが、相互行為において上下（タテ）関係などの人間関係や専門家などの社会的地位を重要視する日本文化的な価値観やコミュニケーションの文化的規則が反映されていることが随所で観察される。つまり、スポーツの実況中継における共話的な相互行為においても、タテ社会における日本文化的な価値観や言語行動の規範が色濃く反映され、参加者たちはその規範に則って文化的実践を行い、その規範を相互行為の中で再認識しているということができよう。次章では、日本文化的な上下（タテ）関係がいかに実況中継の談話に影響を与えているのか、またその相互行為によりどのように文化的規範が再生産されているのか分析を試みる。

3. 事例分析：実況中継の相互行為に現れる社会文化的価値観とその再生産、再認識

本章では、サッカーの実況中継における相互行為にどのように日本社会の文化的な価値

観が影響を与えているのか考察していく。ここで扱う実況中継はFIFAワールドカップブラジル大会を前年に控えた2013年11月に行われたサッカー男子日本代表対オランダ代表の国際親善試合であり、テレビ朝日の中継を行った。事例を実際に分析する前に実況中継の参与者、当時の日本代表のチーム状況などの背景的な情報をまとめる。

3.1 実況放送の参与者

この実況放送に参加しているのは実況担当のテレビ朝日所属のアナウンサー（36歳）と元日本代表選手の解説者M（55歳）、G（46歳）、N（40歳）の4名である。年齢はいずれも放送当時のものである。その他に、ピッチにいるレポーターやハーフタイムに試合の批評をする解説者も存在するが、本稿の分析には含めない。

3.2 日本代表の背景情報

2010年FIFAワールドカップ南アフリカ大会で、岡田武史監督率いる日本代表は予選リーグを突破し、ベスト16入りを達成した。その後岡田監督の後を引き継いだアルベルト・ザッケローニ監督がチームを指揮し始めてから、親善試合で強豪国を破る他、2012年FIFAアジアカップで優勝、2014年FIFAワールドカップブラジル大会のアジア予選を世界最速で突破など、輝かしい結果を残してきた。しかし2013年6月に行われたFIFAコンフェデレーションズカップでブラジル、イタリア、メキシコを相手に3戦全敗を喫し、同年10月の欧州遠征で、日本代表（当時のFIFAランク42位）はワールドカップ欧州予選で敗退が決定したセルビア（同43位）とベラルーシ（同80位）に敗戦（0-2と0-1）し、メディアやサポーターからチームの仕上がり状態について懐疑的に思われている。

3.3 日本代表対オランダ戦の背景情報

FIFAワールドカップ開催年を翌年2014年に控え、2013年の11月に行われた二回目の欧州遠征。既にワールドカップ本大会出場を決めているオランダ戦（当時のFIFAランク8位）の後にはベルギー戦（同5位）が予定されていた。日本はオランダ代表と過去2試合を行っているが、ともに敗戦を喫している（2009年9月5日国際親善試合、於オランダ・エンスヘーデ0-3、2010年6月19日FIFAワールドカップ南アフリカ大会グループリーグ0-1）この欧州遠征はワールドカップ出場を既に決めている日本にとって、戦術の確認などにとって非常に重要な試合である。

3.4 実況中継の相互行為に現れる社会文化的価値観

ここまで試合に関する背景的な状況を説明したが、アナウンサーはこの試合を実況する際に、天候やグラウンド状況などの悪条件、対戦相手オランダの成績（世界ランキングや連続無敗記録など）、オランダ代表の選手に関する情報（所属クラブの説明）、繰り返しメディアで報道されている日本代表の戦術や課題、注意すべきこと、選手のコメントの引用

などの様々な補足的情報を実況の中に盛り込み、日本代表がいかに困難な状況にあり、それを乗り越えようとしているのか、またたとえ負けても仕方がないという状況を構築しようとしている。これらの補足的情報を述べる際に、共話的な談話スタイルや語用論的技法を用いてアナウンサーは自分の見解や仮説が正しいことを、解説者に依存しながら示そうとしている。

以下では、日本語の実況中継が2章で見たような共話的、相互依存的な談話構造をもつと同時に、いかに年齢や社会的立場に関する上下関係や専門家(著名者、経験者)重視といった日本的な文化的価値観が実況中継という相互行為の場において現れているのか考察していく。

3.4.1 相互依存的コミュニケーションと非対称的なあいづち

(7) のアナウンサーと3人の解説者のやりとりは、試合開始直前に行われたものである。天候やピッチの状況(01-10)、対戦相手であるオランダの特徴(18、40)、これまでメディアなどで繰り返し言われている日本の戦術(19-56)などを確認したり、選手のコメント(11-12、57-58)を紹介したりしている。

(7)

01 A: 選手たちの吐く息も白い、そんな息になっています。

02 コンディションが7度、湿度が61%。

03 名波さんがピッチサイドにいます。名波さん。

04 N: はい。

05 A: このコンディションというのはどう見ればいいでしょうかね。

06 N: いやあ、非常に寒いですねー。

07 A: えー

08 N: あとピッチがスリッピーなんでね

09 A: はい

10 N: その点を気をつけて欲しいですね。

11 A: 確かに、あの一、練習を終えた後に、大迫選手あたりが、Nさん、

12 下が少し粘土のような感じがすると行って[いましたけど。

13 N: [そうですね。特にそろってね、

14 前から高い位置でボールを取りに行きたい時に

15 A: はい

16 N: 誰かが滑ってほころんだ所っていうのを

17 A: えー

18 N: オランダそういう所ついてきますから、気をつけて欲しいですね。

19 A: 特に、Mさん、日本にとっては

- 20 M: [はい]
- 21 A: 前からの素早い前からのプレスが生命線の
- 22 ひとつですよ。
- 23 M: そうですね。今日のゲームのディフェンスのポイントとして、どーこの
- 24 ポジションの選手が
- 25 A: はい
- 26 M: 相手のボールを奪う事ができるか
- 27 A: はい
- 28 M: それによってゲームの進め方、戦い方が
- 29 A: えー
- 30 M: 随分変わりますよね。ねえ、Gさん。
- 31 G: そうですね。前からどう、どこのラインで、あの一、プレスに行く事を設定す
- 32 るかということですね。
- 33 A: はい
- 34 G: 前から行きたいんですけども、
- 35 A: はい
- 36 G: 後ろがそれに呼応してくれないと、
- 37 A: はい
- 38 G: 行っても無駄追いになってしまいますから、
- 39 A: はい
- 40 G: 特にオランダはキープ力ありますし、
- 41 A: はい
- 42 G: そこのところでどこでライン設定をして、[どう]
- 43 A: [えー]
- 44 G: アタックをかけて [行く]
- 45 A: [はい]
- 46 G: のかというところが非常に重要だと思いますね。
- 47 A: ですから、今日本のフォーメーションがご覧のように出ていますが、前から
- 48 選手たちが行く中で、ディフェンスラインの選手たちも距離を開けずにこう
- 49 コンパクトに保って行かなくてはならない訳ですよ。
- 50 M: そうですね。ですから、まあ、そのバランスなんかも含めて、
- 51 A: はい
- 52 M: まあメンバーも若干替えていますけども、
- 53 A: えー
- 54 M: どう…形が出るのかっていうのも、
- 55 A: はい

56 M: 前半ね、立ち上がりのポイントとなるでしょう。

57 A: 全員が同じ意識でしっかりつなぐ、自分たちのサッカーを貫いた上で、結果も

58 出したいと話していたのはキャプテンの長谷部。

前章の(4)の事例で見た通り、この(7)でも共話的、相互依存的なやり取りが観察できる。実況アナウンサーは疑問文(05)や「…よね」という相手に確認をとるための表現((21-22)と(47-49))を使用し、直接的に自分の見解を述べるのではなく、経験者としての解説者の見解や説明を逐一仰ぎながら、実況放送を構築していることがわかる。また、解説者も30行目にある「随分わかりますよね。ねえ、Gさん？」とあるように、他の解説者に確認をとりながら発言をしている。このように参与者たちは自分の見解を自立的に述べるのではなく、相互に相手の反応を積極的に引き出しながら、他者と共鳴し、考えを共有している事を確認しながら相互行為を行っていることがわかる。これは日本文化における「相互協調的自己観」(北山1994)や「聞き手志向の言語行動」(藤井・金2014)の現れと言えるだろう。

また、このやりとりの中で頻繁にうたれているあいづちが非常に特徴的に使用されていることが伺える。あいづちに関しては様々な研究があるが、堀口(1997:42)は、あいづちは「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有した事を伝える表現」と定義している。また、メイナード(1993)は日本語の会話と英語会話のあいづちの回数を比較しているが、英語よりも日本語では約2倍のあいづちが使用されると述べているが、これは英語と日本語のあいづちの機能が異なり、水谷(1983)なども述べている通り、日本語では共話的に談話を構築するために参与者があいづちを使用する。つまり、日本語ではあいづちが相手の発言を促進し、話し手と聞き手が情報や感情を共有し、確認しながら会話を進めていくのである。

(7)のやり取りの中でも、アナウンサーが解説者に質問を投げかけ(もしくは同調を求め)、解説者の見解を導きだし、その見解に対して頻繁にあいづちをうち、配慮を示していることが伺える。一方、解説者がアナウンサーの発言に対するあいづちの回数は非常に少ない事、特に47行目から49行目に特徴的に現れているように、アナウンサーが話している最中にはほとんどあいづちをうっていないことがわかる。このあいづちの非対称性は、相手の話の内容に対する注意量と相手への配慮の差と考えることもでき、アナウンサーと解説者の社会的地位を反映し、教授する者と教授される側という立場の違いを生み出しているとも考えられる。

3.4.2 提案の否定とその受容: 関係をわきまえた譲る言語行動

(8)の事例では、アナウンサーがオランダ代表に左利きの選手が多い事について言及し(01-04)、このことが日本代表に対して困難を与えることを伝えようとし、解説者のN(現役時代は左利きの選手)に相手に関する共通認識の表明と受容の要求を行う機能を持つ「～よね」という表現を用いて、同意を求めている。

(8)

- 01 A: オランダは左利きの選手が5番プリント、8番ストロートマン、10番ファン・
02 デル・ファールト、そして11番ロッベン。Nさん、前目の、攻撃的な選手に
03 左利きが多いというのは守る方としても、ちょっといつもと感覚が変わって来
04 ますよね？
05 N: =なんですか [ね]
06 A: [え]
07 N: …ちょっと僕も自分が [左なので
08 A: [えー]
09 N: よくわからないですけどね、
10 その辺は。はい。
11 A: はい。
12 (1.5)
13 A: …前線に (..) そうした選手たちもそろえています、オランダ。

この事例では、アナウンサーが自身の見解に対して解説者に同意を得ようと「ちょっといつもと感覚が変わって来ますよね。」(03-04)と自分の見解に対する支持を得るための表現を使用しているが、質問の受け手である解説者Nは「なんですかね」(05)とアナウンサーの見解に同意しかねることを表明し、(07)で「ちょっと」という緩和表現を使用しているものの、「よくわからないですけどね、その辺は」(09-10)と実況アナウンサーの見解を明確に否定している。一方、アナウンサーはこの解説者による(6行目の「え」が表しているように予期していなかった)否定を、単に8行目の「えー」、11行目の「はい」とあいづちをうちながら、反論する訳でもなく聞いているに留まり、1.5秒ほどの沈黙の後再びためらいながら「前線にそうした選手たちもそろえています、オランダ」と述べるにとどまっている。アナウンサーは自分の示した見解に対する解説者の否定的なコメントに困惑し、賛同できないにも関わらず、その解説者との関係を維持するために明確な否定をすることが許されないことがわかる。この事例が示している通り、日本語の実況中継の談話は一見相互協力的な談話に見えながら、実は相互行為の背後に日本文化特有の上下関係(年功序列的關係)や専門家を重視した文化が存在していると言える。

(9)でも両者の関係が反映されているやり取りが観察される。この事例はアナウンサーがオランダ代表の監督の緻密さやオランダ代表の戦歴について紹介している場面である。アナウンサーは実況モードとは異なり、低いトーンで日本代表が対峙している相手がいかに強いのかということを視聴者に伝えようとしている。

(9)

- 01 A: オランダを率いるルイ・ファン・ハール監督がもう早くもメモを取りはじめま

02 した。昨年の7月に監督に就任して、オランダ代表は何と言っても監督就任後
03 16試合を戦って、破れたのが一度だけ。しかもそれが就任初戦、日本が今度
04 日本時間の20日に戦うベルギーのみです。1年3ヶ月オランダ代表は負けが
05 ありません。

06 M: =じゃあ、そろそろだな、今日だな。

07 A: えー… [その一

08 M: [へへへへへ、今日だな、へへへ

09 A: …その一…そのシーンが果たして訪れるか。

10 M: [このまま行けばねえ

11 A: [さあ、このサイドでの攻防です。一対一にはさせません。山口がカバーに行き
12 ました。そして長谷部。縦にボールが通る。ストロートマン。左利きのプレーヤ
13 ー。レンズ、入ってくる。内田が身体を投げ出しました。

この事例では、アナウンサーはオランダ代表の監督の情報や代表チームの戦歴を紹介しながら、日本代表がいかに強く困難な相手と対峙しているのか、この試合に勝つことがいかに難しいのかという情報を実況に織り込もうとしているのであるが、解説者のMがアナウンサーの意図を共有できず、6行目にあるように「じゃあ、そろそろだな。今日だな」と実況中継のフレームから外れた視聴者（ファン）のような発言し、その目論見をあっさりと壊してしまう。この予想外の発言にアナウンサーは7行目で「えー」や「その一」と言い淀んでいるように、戸惑いを隠せずにいるが、解説者の発言を直接否定できずにいる。そして言い淀んだ後、アナウンサーは「そのシーンが果たして訪れるか」と疑問文を投げかけ、同調している。その後インタラクションのモードから即時実況のモードに移行することにより、間接的に解説者の見解に否定的な立場を示しながら状況を立て直そうとする。状況が常に変化し続ける実況中継では、解説者の解説よりもアナウンサーの実況の方が優先されるため、アナウンサーが解説者との対話中に即時実況モードへ切り替えることで解説者からターンをとることがよくあるが、これは慣例として許されている。Aはアナウンサーに与えられているこの権利を利用して、明確な不同意を表さずに、中継を続けようと試みていると考えられる。

実況アナウンサーは試合の序盤から日本代表が置かれている困難な状況を強調し、オランダ代表に勝つ事は困難であるということ、様々な補足情報を通じて自分の見解として示している。その中でたとえ(8)や(9)の事例のように解説者から自分の見解に対するサポートがえられなかったとしても、アナウンサーは解説者の指摘を直接否定することはできず、相手に配慮しながら譲る行動をとっていることがわかる。井出(2006)が述べているように、上下関係という枠の中で、相手のことを配慮し、自分の立場を「わきまえた」行動がアナウンサーには見られるということができよう。

3. 4. 3 経験者と未経験者の差異化—経験者による未経験者の相互行為からの排除

(10) のやりとりの前まで、(7) で挙げたようにチームとしてコンパクトにまとまり、前から積極的にプレスをかける「自分たちのサッカー」を日本が実践しており、主導権を握っていた。メディアで繰り返し報道され、アナウンサー、解説者、視聴者により共有されている「自分たちのサッカー」というキーワードをもとに相互行為が行われている。このやり取りは前半8分、日本が攻勢を仕掛けている中、戦術通り高い位置で（オランダゴールに近い所で）ボールを奪い、チャンスを作った場面である。長友が左サイドを上がり、清武からパスを受け、ペナルティエリア内に侵入し、シュートではなく、パスを選択しセントリングを上げたが、岡崎のシュートが外れてしまった場面である。

(10)

01 A：清武、外を長友が回る。長友だ。中に3人入って来たあー！

02 M：[いやあー！

03 G：[あー！

04 A：岡崎のシュートは枠を捉えられません！

05 M：いやあ、この二つで一つ [だったらねえ、これ。

06 A： [えー

07 G：こういうとこですけどね。

08 A：[えー

09 G：[んー

10 A：Nさんいい展開でしたね。

11 N：=これGさん、長友ノールックでシュートっていうのもねー。

12 [面白かったですけどねえ。

13 G：[ねえ(.) それも面白い選択でしたけどね。

14 (2.0)

15 A：今日 [は

16 G： [ただ中に人数掛けられてますよね。

岡崎のシュートが外れた直後にMが5行目で「この二つで一つだったらねえ」と述べているが、この発言によりMは「パスとシュートだったら、ここではシュートの方が良かった」と見解を提示している。これに対してGは「こういうとこですけどね」と「こういうところでシュートを撃ち、得点を挙げなくてはならない（世界トップクラスのチームには勝てない）」という見解を示している。このように解説者であるMとGはシュートではなくパスをした長友の選択に対して批判的な見解を示しているが、アナウンサーはあいづちをうって相互行為に加わっているものの、この解説者同士の見解の真意をつかめていない。その後アナウンサーは試合開始から繰り返し解説者と確認して来た日本が目指している戦

術が機能していると考え、もう一人の解説者であるNに対して「Nさん、いい展開ですね」と同意を求めている(10行目)。しかし、その問いかけに対しNはアナウンサーに答えるのではなく、Gに対して「Gさん、長友ノールックでシュートっていうのもね」と即座に話しかけている。

このやり取りにおけるNの行為は何を示しているのだろうか。まず、Nはアナウンサーの質問に解答せずに、アナウンサーの質問により与えられたターンを利用し、Gに自分の見解を投げかける事で、アナウンサーの見解に同意できないことを示している。それと同時にNはアナウンサーではなくGに話しかける事により、解説者とアナウンサーという役割の違いだけではなく、第一線で活躍した経験をもつサッカー経験者とサッカー未経験者という立場の違いを明確にし、両者の立場の差異化をはかっている。その時、サッカー未経験者のアナウンサーは専門家である解説者同士のやり取りから排除されてしまい、相互行為に参加できず、2秒ほどの沈黙が続く(日本の実況放送における2秒の沈黙は非常に長いものである)。そしてこの沈黙の後、15行目で「今日は」と話を再開させようとするが、すぐにGが発言をすることで、ターンを奪われてしまう。この一つのプレーに関する談話の中で、アナウンサーと解説者の共同的な相互行為は、教授する専門家と教授される未経験者という双方の立場を明確に差異化することになり、アナウンサーは相互行為から排除されてしまう。

4. 考察

前章で見た通り、日本のスポーツ実況中継においてはアナウンサーと解説者の共話的相互行為により談話が構成されているように思えるが、そこで行われる相互行為を詳細に分析する事により、相互依存的な文化的価値観だけではなく、「年功序列による上下関係」や専門家を重要視する「情報を教授する専門家と情報を教授されるアナウンサー」という立場の違いが相互行為の中で示されているということが出来るだろう。

片桐(2014: 170)が「上位下位の権威関係を前提としながらも、合意形成場面での能力の発揮については両者がお互いを尊重し合う」と述べている通り、日本文化では上下関係が相互行為の前提となっているが、その縦関係の中において上位者は下位者に対して権威を明示的に主張することなく、参加者はそれぞれの能力を尊重し合いながらコミュニケーションを行っており、日本語の実況放送においても解説者もアナウンサーの見解を尊重しながら共話的に談話を構築している。それと同時に、この共話的コミュニケーションにおいても、タテの関係をわきまえたやりとりが観察され、(8)と(9)で見た通りアナウンサーは解説者の発言内容を明示的に否定できず、譲る行動を示し、モードを変えることなどを通じて間接的にしか否定的見解を示せない。更に、このように参加者たちは社会規範に則って言語行動を選択しているだけではなく、片桐(2014)が述べている通り、参加者の行為選択がそれぞれの関係を確認するシグナルとして機能していると言う事が出来るだろう。

情報の受け手である視聴者はスポーツを観戦すると同時に、このように慣習的に行われ

る実況中継の相互行為に触れ、慣れ親しむことにより、自らが属している言語集団の社会規範を習得し、修正し、再確認していくことになる。Ferguson (1983) が指摘している通り、スポーツ報道という特定のジャンルにおける談話からも、その言語集団の日常の様々な状況における言語規範が育まれていくと考えられる。

5. おわりに

本稿では、スポーツの実況中継における相互行為を分析し、共話的に、相互依存的に行われている実況中継の中で、アナウンサーと解説者の相互行為には、日本文化で重要視されている年功序列や教授者（専門家）と被教授者（非専門家）などの上下（タテ）関係という文化的規範が常に意識され、様々な語用論的技法により顕在化、再生産されていることを考察した。スポーツという娯楽性のある出来事を伝達する際にも、地位や年齢などに基づいた上下関係が常に意識され、上下関係が重要視される社会においてそれぞれの立場や役割をわきまえた行動が見られる。

本稿は実況中継の中のいくつかの事例を分析したにすぎないが、ここで扱ったような相互行為は、スポーツの種類に関わらず実況中継の談話において頻繁に観察することができる。スポーツの実況中継において、アナウンサーと解説者はお互いに相互依存的なやり取りを行っている一方で、文化的規範に則って行動し、その相互行為を通じてそれぞれの役割や地位を確認し合い、年齢や立場による社会的な関係をわきまえながら絶えず維持し、文化的規範を再生産しているということができよう。

注

* 本論文は、科学研究費萌芽研究 (C) 「英語学習における英語らしさの追及一事態把握の志向性に基づくライティング教育の提案」(課題番号 23652146 研究代表者 谷みゆき) による助成を受けて執筆されたものである。

1. 例文は全てFerguson (1983) のものである。
2. 例文は全てBeard (1998) のものである。
3. 訳語は三宅 (2003) による。
4. (1)から(3)、(5)、(6)の事例はイングランド・プレミアリーグ2013—2014シーズンChelsea FC(ホーム) 対 Cardiff City FC (2013年9月22日、於: Stamford Bridge Stadium、4対1) の試合の実況中継である。日本ではNHK BS1において放送された。主音声では日本人のアナウンサーと解説者による実況中継が、副音声では現地のコメンテーター2名による実況中継が放送された。
5. この談話の参与者や背景的な情報などの詳細は、3章で説明している。
6. 植野 (2014) は教師と学生のやり取りにおける問いかけ質問を分析しているが、日本語の会話では社会的に上位に位置する教師の方が、頻繁に質問を投げかけて会話を進めていくとの指摘がある。実況中継では社会的に下の立場にあるアナウンサーの方が実況中継全体を進行する責任があるため、上の立場である解説者に質問を頻繁に投げかけることになる。

7. ミスター・オー・コーパスの概要は井出・藤井 (2014) にまとめられているが、日本語、英語、韓国語、アラビア語、タイ語の言語話者の相互行為を収録した音声と映像であり、この映像データをもとに様々な言語文化の比較が行われている。井出・藤井 (2014) にはこのデータを分析した様々な研究がまとめられている。

トランスクリプション記号

- [オーバーラップ開始部
 (.) マイクロポーズ
 (..) 0.5秒以上のマイクロポーズ
 = 続けて発話された箇所
 … 言いよどみ
 — 長音
 @@@ 聞き取れない部分

参考文献

- 藤井洋子・金明姫. (2014) 「課題達成過程における相互行為の言語文化比較」『解放的語用論への挑戦』くろしお出版. pp. 57-90.
- 堀口純子. (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版.
- 井出祥子. (2006) 『わかまえの語用論』くろしお出版.
- 井出祥子. (2014) 「解放的語用論とミスター・オー・コーパスの意義 —文化・インターアクション・言語の解明のために—」『解放的語用論への挑戦』くろしお出版. pp. 1-32.
- 片桐恭弘. (2011) 「会話インタラクションの文化的依存性 —場の言語学の試み—」『信学技報』電子情報通信学会. pp. 67-70.
- 片桐恭弘. (2014) 「対話から見た権威の様態について —能力と敬意」『解放的語用論への挑戦』くろしお出版. pp. 157-174.
- 北山忍. (1994) 「文化的自己観と心理的プロセス」『社会心理学研究』10 (3), pp.153-167.
- メイナード, 泉子. (1993) 『会話分析』くろしお出版.
- 水谷信子. (1983) 「あいづちと応答」水谷修編『講座 日本語の表現』筑摩書房. pp. 37-44.
- 水谷信子. (1985) 『日英比較: 話しことばの文法』くろしお出版.
- 三宅和子. (2003) 「スポーツ実況放送のフレーム —放送に向けられた視聴者の不快感を手がかりに」三宅和子他編『メディアとことば2』ひつじ書房. pp.94-127.
- 植野貴志子. (2014) 「問いかけ発話に見られる日本人の先生と学生の社会的関係」『解放的語用論への挑戦』くろしお出版. pp.91-122.
- 吉田雅昭. (2008) 「終助詞「ヨネ・ヨナ」の機能・意味について」『言語科学論集』12号. 東北大学大学院文学研究科言語科学専攻. pp.37-48.
- Beard, Adrian. (1998) *The Language of Sport*. London, New York: Routledge.
- Ferguson, Charles A. (1983) Sports Announce Talk: Syntactic aspects of register variation. *Language in Society*, 12. pp. 153-172.
- Fujii, Yoko. (2012) Differences of Situating Self in the Place/Ba of Interaction between the Japanese and American English Speakers. *Journal of Pragmatics* 44: 636-662.

Goffman, Erving. (1981) *Forms of Talk*. Pennsylvania: University of Pennsylvania.

Krone, Maïke. 2005. *The Language of Football- A Contrastive Study of Syntactic and Semantic Specifics of Verb Usage in English and German Match Commentaries*. Stuttgart: ibidem-Verlag.